

社会福祉法人 慈愛会 養護老人ホーム篠原の里

炊き出し支援活動 ホームレスの人たちへの

積み重ねてきた 地域活動への参加

篠原の里は、乳児院や児童養護施設、特別養護老人ホームなど6カ所の施設・事業を展開する社会福祉法人慈愛会が運営する養護老人ホームである。篠原の里では、法人が掲げるテーマの一つである「地域福祉への貢献」を実現するため、さまざまな地域活動に取り組んでいる。たとえば、施設周辺の海岸線清掃、登校時の地域の子どもたちの見守り、地域バザーへの参加、正月の門松製作といった活動だ。

バザーで作る布製品は縫製が得意な女性陣の担当。門松製作の中心になるのは、昔造園業を営んでいたという男性で、竹を山から切り出すところから行い、出来上がった門松は周辺の施設に届け、飾られている。老人ホームの利用者たちが少しでも地域に関われることはないだろうか、誰かの役に立つことで生きがいや張り合いを感じられるような取り組みができないだろうか、と職員が考えながら少しずつ活動の幅を広げてきた。

平成24年2月からスタートしたホームレスの人たちへの炊き出し支援も、こうした活動の延長線上に始まった。毎月第4月曜日に、施設からは車で40分ほどかかる福岡市博多区の出来町公園に出向き、120食分の炊き出しを行っている。公園で生活している人たちが寒さを一時的にでも忘れられ、「ほっとする暖かさ」を感じられるようにするのが目的だ。炊き出しの料理を作るのは、調理経験の豊富な女性利用者たちであり、認知症があっても要介護状態ながらも、積極的に職員と一緒に公園での配布に参加する人もいる。

ホームレスのY氏との出会い

この活動が生まれたきっかけは、篠原の里の田中英樹施設長が福岡県の地域生活定着支援センターから打診されて矯正施設を退所する高齢者の受け入れを決めたことだった。触法高齢者、障害者が増える一方で、刑期が終わり、出所した高齢者の行き先というのはほとんどないのが現状だ。そのため経済的基盤もなく、適切な支援を受けられない状況なかで、地域に戻ってからも再度罪を犯すことが少なくない。こうした人たちの受け入れをすることも、社会福祉法人としての重要な役割ではないか。田中施設長は、不安がる職員たちに何度もその社会的意義を説明し、講師を招いた研修会等を重ねて受け入れをスタートさせた。

受け入れた2名のうち1名が元ホームレスだったことが、意外な出会いを呼ぶことになる。ある時この利用者は、施設での生活に反発し、無断外泊をして行方知れずとなったのだ。職員たちは総出で探しまわるが、施設の周りではいくら探しても見つからない。もしかすると、彼のこれまでの生活から博多駅前の公園に戻っているのではないかと推察し、施設からは相当離れたその公園に出向いて探すことになった。慣れない土地であったため、その公園で周囲のホームレスの面倒もみていたホームレスのY氏を訪ねて相談したところ、数日してY氏から男性を見かけたと施設に連絡が入り、無事に男性を発見することができたのである。

定期的な炊き出し活動を発案

この時に篠原の里の職員たちは、初めてホームレスの人たちの生活を実際に知ること

になった。食べるものも十分ではなく、寒さの中で凍えるような毎日を送っている人々。協力してくれたお礼としてY氏にカップラーメンを持参すると、大変喜んでくれた。こうした経験から、田中施設長が今後も何か自分たちに支援できないかと考えるようになり、定期的な炊き出し活動が発案されたのである。坂上竜三副主任支援員は、その時のことを次のように語っている。

「施設長からの提案ではありましたが、私たちは正直なところ、あまり気乗りしませんでした。というのも、ホームレスの人たちに対してマイナスイメージを抱いていたからです。彼らに声を掛けるのは少し不安だし、公園で炊き出し活動をすると他人の目も気になります。しかしさまざまな議論を重ねるうちに、ホームレスの人たちが博多区周辺だけでも100名を超えることを知りました。福祉に携わる者としてこの現状を放置してよいのだろうか。少しでも自分たちにできることがあるのなら、積極的に関わらべきだと考え直したのです。」

しかし、実際に活動を始めるとなると、公園の使用許可の問題や食事のメニュー、公園内では火の使用が禁止され、温め直しができないなど、様々な課題が出てきた。他のホームレス支援団体から情報をもらったり、公園の使用については何度も行政に出向いた。メニューは衛生上の問題にも注意しながら施設の管理栄養士が検討を行った。

社会福祉法人 慈愛会 養護老人ホーム篠原の里

住所 〒819-1129 福岡県糸島市篠原西2丁目13番13号

電話 (092) 322-2429

FAX (092) 322-6511

URL <http://www.jiaikai-fuk.or.jp/shinohara/>

調理から利用者が中心に担当

炊き出しで提供するの、豚汁とお茶と携帯カイロ。施設の調理場で120食分の豚汁を作り、暖かいものが提供できるように万全の保温体制を整えて鍋のまま車で会場まで運んでいく。大量の食材を手際よくカットし、鍋で煮込んでいく。経験豊富なお年寄りたちは、毎回慣れた手つきで調理を楽しんでいるという。最近は少しでもお腹にたまるものを、と考へ、すいとんを作ることも多い。

「調理に関しては、利用者の方がベテランです。下手に職員が手出しすると、怒られてしまうくらいです。」と、久保洋子主任生活相談員。篠原の里でこれまで取り組んできた地域活動同様に、ホームレスへの炊き出し活動も職員と利用者が一体となって行っている。調理だけ参加の人もいれば、実際に公園に同行して豚汁を配布する人もいる。これまでにのべ200名を超える参加者があったが、その中の半分は老人ホームの利用者だ。

また、炊き出しの際には、相談コーナーを設置。炊き出しに集まった人たちの相談窓口の機能も持たせ、行政や社会福祉士会等の相談窓口を掲載したチラシを渡すなどの情報提供も行っている。実際には炊き出しの際に相

談に来られる人はほとんどないということだが、毎回集まる人たちの顔ぶれも少しずつ分かってきており、活動を継続する中で、何かあった時に相談先として篠原の里を思い出して頼ってもらいたい、と考えている。

利用者とのコミュニケーションで和やかな炊き出し

「公園での豚汁配布作業に参加してくれている利用者の中には、要介護1の高齢者もいるのですよ。昔仲居さんをやっていただけあって、調理技術は抜群に高く、接待も上手なのです。公園では『愛情込めて作ったから、これ食べて、元気にしてね〜』なんて、一番大きな声でホームレスの方に声かけしてくれています。ホームレスの方々と『美味しいよ』『ありがとう!』なんてコミュニケーションがあって、彼女のおかげで、雰囲気も和やかだねと他の支援団体の人からも言われます。」

利用者たちの中には、ホームレスの人たちの姿に昔の自分を重ねている人もいるようだ。一步間違ると、自分もあの列の中にいたかもしれないともらす人もいた。だからこそ、他人事でなく同じ目線で食事を渡すことができるのだろう。そんな姿に、篠原の里の職員た



「まず実践」をスローガンに、さまざまな活動に取り組んでいる篠原の里の皆さん。前列左が田中英樹施設長。

ちはむしろ勉強させられることが多いと異口同音に語っている。

今後の課題と展望

当初はむしろ田中施設長による理念的な考えが先行した炊き出しであったが、スタートして二年目に入った今ではすっかり職員たちもその意義を認めている。自分の存在がまだまだ人の役に立つと知った利用者たちの元気な姿を見ると、このような活動というのは「人に何かを与える」だけでなく、「自分たちにもプラスになる」と実感したからである。坂上副主任は言う。

「『まず実践』という施設のスローガンがありますが、本当にその通りだなと思います。これからは利用者だけでなく、もっと多くの人たちを巻き込んだ炊き出し活動が実施できればいいですね。」

これまでも法人内の職員や、児童養護施設の子どもたちにも炊き出しへの参加を募ってきた。この動きをさらに地域住民にも広げて、ボランティアの輪を大きくしたいというのだ。炊き出し場所を現在行っている公園以外に広げることも検討中だという。

今後の課題は、費用的な課題とボランティ

アの確保である。炊き出しの費用はすべて地域バザーでの商品販売収益(30,000円程度)から拠出されている。万が一、食中毒を起こした危険性なども考えて、ボランティア保険にも加入しておく必要がある。

職員の負荷も無視できない。ギリギリの人員配置で運営している施設現場にすると、たとえ月1日程度といえどもそこに数名の職員を割くというのは非常に厳しい状況にある。理想と現実のギャップの中で、なんとかやりくりしているのが実状なのだ。

また、公園での活動については、職員も利用者と同じ一人のボランティアとして参加している。田中施設長は「社会福祉法人の職員こそ、もっとボランティア活動に積極的に参加すべき」と言う。「福祉の仕事に従事していながら、意外にボランティア経験が少ないのが社会福祉法人の職員の現状です。職場にボランティアを受け入れるだけでなく、自分たちから率先してもっとボランティア活動に参加することで、それが結果的に、自分たちのレベルアップにもつながるのではないのでしょうか。」

利用者と職員が一体となって、地域福祉に貢献することを目的として実施されている篠原の里のホームレス支援炊き出し活動。「た



経験豊富な女性利用者が調理を担当。

チェックポイント

事業・活動の背景、きっかけや課題

- ◆施設から失踪してしまった利用者を探している最中にホームレスのY氏と出会い、その生活の厳しさを知ることとなった。
- ◆地域に100名を超えるホームレスの人たちがいる現実に対して、福祉に携わる者として何かすべきではないかと考え、炊き出しを始めることになった。
- ◆具体的に検討をはじめると、公園の使用許可や食中毒発生リスクへの備えなど、様々な課題が明らかになり、一つひとつ解決していった。

体制や財源の工夫、人材や資源の活用

- ◆材料費についてはバザーの収益で購入している。
- ◆法人の他施設職員や老人ホームの利用者、児童養護施設の子どもたちにも呼びかけて炊き出しのボランティアを確保。

関係機関との連携

- ◆ホームレスの人からの具体的な相談等に関しては社会福祉士会や行政の窓口になくなど連携している。
- ◆他のホームレス支援団体との情報交換。

とえ規模は小さくても、自分たちができることからスタートする」という姿勢と実行は、全国の福祉関係者に大きな示唆を与えてくれる。



利用者も炊き出しのボランティアに参加